



WHO をゆく 感染症との闘いを超えて

尾身 茂●著

本書が、多くの医学生、若い医師の
人生の指針となることを期待する

評者

高久 史磨

自治医科大学長

医学書院から、尾身茂教授が刊行された『WHO をゆく ― 感染症との闘いを超えて』の書評を依頼された。

尾身教授は私が勤務している自治医科大学の1期生である。新設の医科大学の1期生には開拓精神の旺盛な元気な学生が多かったが、自治医科大学の1期生も例外ではなかった。自治医科大学の場合、卒業生は各県に戻り、離島・へき地の医療に従事するという、世界に例を見ない新しい試みであったから、特に威勢の良い1期生が多かったと思う。

私は開学時から10年間教授として学生を教えたので、多くの1期生の事を憶えているが、尾身教授についてはご本人には失礼であるが、あまり記憶に残っていない。恐らく尾身教授が学外活動にもっぱらエネルギーを注いで、私の授業やゼミにあまり顔を出されなかったからであろう。

しかしWHOに行き、マニラに勤務されるようになってからの尾身教授の活躍には、目を見張るものがあった。本書『WHO をゆく』に詳しく書かれているように、アジア西太平洋地区のポリオの根絶は、尾身教授の努力なくしては成り立たなかったと言っても決して過言ではない。その活躍のせいもあって、尾身教授はWHOの西太平洋地区の事務局長になられた。私は自治医科大学の学長になってから毎年

6年生に最終講義を行い、卒業生の国内外の活動について紹介しているが、その際必ず尾身教授がWHOの西太平洋地区の事務局長として活躍しておられることを話している。医学生の中には国際医療協力に興味を持つ者が多いが、自治医科大学の学生の中にも義務年限終了後、国際医療に貢献する事を希望している者が少なくない。私が知っている限りでも、現在UNICEFのソマリア支援センターで働いている11期生の国井修医師などがその良い例である。尾身教授は国際医療で活躍する医師のロールモデルであった。本書では、尾身教授が事務局長になられた後に起こったSARS制圧対策、鳥インフルエンザ対策についても詳しく述べられている。

また、本書で尾身教授はWHOにおけるご自身の活動報告の他に、「リーダーシップ論」、「日本の医療と社会を考える」、「健康と文明」についてのご自身の見解を述べられ、最後に「若者へのメッセージ」をもって締めくくられている。私は本書が、多くの医学生、若い医師によって読まれ、彼・彼女らの人生の指針となることを強く期待している。

●A5 頁176 2011年

定価2,940円(本体2,800円+税5%)

[ISBN 978-4-260-01427-4] 医学書院刊